

東欧ハプスブルク帝国の初めの神聖ローマ帝国三皇帝 フェルディナント1世、マクシミリアン2世、ルドルフ2世

倉田 稔

この論文は、小樽商科大学『人文研究』第140輯、2020年12月、に出した物であり、誤記がいくつかあったので、訂正して、原稿をここに出す。

目次

はじめに

モハーチの戦いまで

フランス ハンガリー モハーチの戦い

フェルディナント1世

ハンガリーでの三つ巴の戦い 治世

マクシミリアン2世

ルドルフ2世

マニエリスム 錬金術 ルドルフの長男 ティコ・ブラーエ

ヨハネス・ケプラー アルチンボルド リーヒテンシュタイン

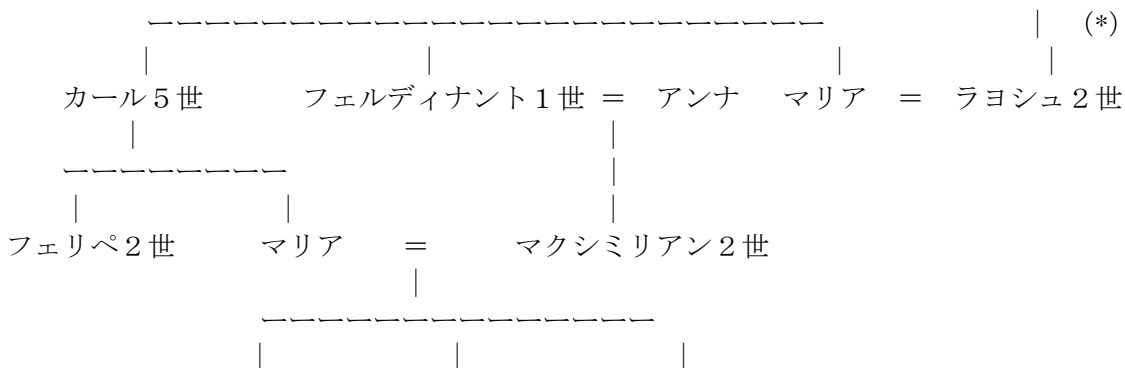
おわりに

はじめに

中期ハプスブルク時代に、スペイン系ハプスブルクと東欧系ハプスブルクに別れた。神聖ローマ帝国皇帝はその東側が受け継いでしまい、一方、スペイン系ハプスブルクは没落してしまう。その東欧系ハプスブルクの初めの三代の皇帝を描く。

ハプスブルク系図

ウラースロー2世



(*) ヤギェウ家のボヘミア王・ハンガリー王

モハーチの戦いまで

神聖ローマ帝国皇帝となるハプスブルクのマクシミリアン 1 世 (1) は、妃・ブルゴーニュ家のマリーを事故で失ってから、ミラノのスフォルツァ家のビアンカ (1472-1512) と 1494 年に持参金目当てで再婚していた。彼女はガレアツォ・マリーア・スフォルツァ (2) の娘であった。

マクシミリアン 1 世の行った二重結婚は、息子フィリップ美公とスペインのフアナ (3) とであり、その間に孫としてカール (4) とフェルディナントとマリアなどがいた。もう一方は、娘のマルグリートとスペインのフアン王子とであり、子供はなかった。

1506 年に、ヤギェウ家のボヘミア王・ハンガリー王・ウラースロー 2 世が亡くなり、息子・ラヨシュがボヘミアとハンガリーの王になった。時に 10 才だった。彼とアンナとの母は同じくアンナといい、教養のある人であって、出産で亡くなった。

マクシミリアン 1 世は、その孫のフェルディナント (1503-64) と孫のマリアの二重結婚を 1515 年に決めた。相手は共にヤギェウ (あるいはヤギレオ) 家であった。1 つが、そのウラースロー (= ヴラジスラフ) 2 世の息子・ボヘミア王でハンガリー王のラヨシュ 2 世とわが孫マリアの結婚である。2 つが、ウラースローの娘アンナ王女 (ラヨシュの姉) とわが孫カールあるいはその弟フェルディナントとの結婚である。ヤギェウ家の側ではアンナを兄カールと結婚させたがった。アンナもそうだった。というのは、スペイン王その他の王カールは、将来皇帝になる人だったからである。アンナは 10 才でハプスブルクの兄か弟と結婚することとなったが、兄弟のどちらかは未定だった。とりあえず代理結婚はした。(5) アンナはフェルディナントと婚約する。カールは 1526 年にポルトガルとアラゴンの王女イサベルと結婚した。いとこ結婚である。マクシミリアン 1 世は、アンナとラヨシュをウィーンに呼んで育てた。マクシミリアン 1 世はデューラーを庇護した。

カール 5 世は、バルバラ・ブロムベルグとの間にドン・ファン・デ・アウストリアをもうけ、ヨハンナ・ファン・デル・ヘインストとの間にマルガレーテをもうけた (6)。

カール 5 世は、カルロス宮 (ルネッサンス様式) をアルハンブラ宮殿に接して作った。またブリュセル、バリエドリッド、フランクフルト、アウグスブルグ、ナポリなどに宮殿を作った。彼は皇帝戴冠式を 1530 年にローマでなくボローニャで行った。

カール 5 世は、1545 年にフェリペをもうける。夫婦は愛し合った。庶子マルゲリータはベルギーのマルゲリータに育てられた。カール 5 世は画家ティチアーノを気に入り、宮中伯にする。

フェルディナントは、スペイン・カスティーリア生まれで、祖母イサベラによってスペインで育てられた。祖父フェルナンドは彼を可愛がった。彼は陽気で快活であった、1516 年に彼はオーストリアへ行き、逆に兄カールがスペインに来ることになった。カールはスペイン育ちではない。1521 年に祖父マクシミリアン 1 世皇帝の遺産分割で、カールがハプスブルクの西側の諸国を、つまりスペイン等を、フェルディナントがオーストリアを相

続することになった。そして、フェルディナントは前出ヤギェウ家のアンナと結婚したのである。スペイン王となったカールは皇帝になる。カールと妹マリアとはベルギーで、マクシミリアン1世の娘・つまり叔母・賢いマルガリータに育てられた。

1519年、スペインへ来た兄カールと弟フェルディナントは初めて会った。1522年、フェルディナントは、アンナ・ヤギェウと結婚し、生涯愛し合うことになる。フェルディナントは敬虔で、アンナが初恋だった。アンナは初めフェルディナントを愛したわけではなかったが、彼が誠実にアンナを愛してくれるので、信頼し、愛するようになった。こういう時代に珍しいことだった。アンナは信心深く思慮深かった。2人の結婚後の翌年、妹マリアとラヨシュが結婚する。フェルディナントと妹マリアは初めてオーストリアで会うのだった。

フランス

フランスのランソワ1世(1494 - 1547、在位 1515-1547)は、ヴァロア家の人で、フランソワの母は、サヴォア家であった。カール5世とヘンリー8世の時代の人である。彼はアングレーム伯となった。ルイ12世と王妃アンヌ(・ド・ブルターニュ)との間に生まれたクロードと、1514年に結婚した。翌1515年にルイ12世が死んだので、王に即位した。フランソワ1世は人文主義の教育を受けた。この最初の結婚は国王の座を狙ったものである。クロードは王妃になる。イギリスの有名なアン・ブリン(ヘンリー8世妃)とその姉はクロードに仕えた。クロードは多産で、厳格だった。1524年に死去した。フランソワ1世の公式愛人は2人だった。

フランソワ1世は1519年、皇帝選挙に出て、負ける。彼は多情だった。愛人としてブルターニュ公妃フランソワーズを誘いだそうとする。結局、成功し、承諾させ、10年間愛妾とする。

イタリア領有に野心をもつフランソワ1世が、一万の兵でパリを出発し、リヨンを経、アルプスを越え、イタリア戦争を進めた。1515年、マリニャーノの戦いに勝利し、ミラノを占領し、スフォルツァ家を追放した。スフォルツァ家にはレオナルド(ダ・ヴィンチ)が仕えていた。1516年、フランソワ1世はレオナルドを雇ったのである。レオナルドがフランスに来て、クロ・リュセ城に住む。フランソワ1世は、アメリゴ・ヴェスプッチのスポンサーにもなる。

フランソワ1世は、南下し、パヴィアを攻めた。フランソワ1世はカール5世と対抗するため、何とトルコと組む。しかしフランソワ1世はカールに大敗し、1525年に捕虜となった。彼はマドリドへ幽閉された。スペインとフランス、このカトリック両大国が戦ったので、プロテスタントが伸び、その上、オスマン帝国はウィーン攻撃をした。ヨーロッパでは1521-44年は、イタリアを巡る戦いの時代であった。

フランスでは、王の母ルイズ・ド・サヴォイが政務を執り、事もあるうに、イスラームのオスマン帝国に息子の解放のため支援を求め、同盟を求めた。時の皇帝スレイマンはそれを歓迎した。

マドリドでフランソワ1世は牢獄につながれたわけではなく、カールの姉エレオノールをくどく。彼は、こども2人を人質にして本人は帰国する。彼の宮廷に若いアンヌが登場し、公式愛妾になる。前出の愛人フランソワーズは去る。フランソワ1世は2度目の結婚

をする。スペインのエレオノーレである。だが愛人ディアーヌ・ポアチエが登場する。1547年、フランソワ1世は没する。エレオノーレはスペインへ帰る。

フランスではシャルル8世、ルイ12世、フランソワ1世と王位が移り、共にイタリア戦争を仕掛けたのだった。

ハンガリーでの三つ巴の戦い

15世紀、ハンガリー王国に、トランシルヴァニア（＝ジューベンビュルゲン）のフニャディ家のマチャーシュ1世が出て、全盛期をなした。マチャーシュ1世のハンガリー軍は、1485年にウィーンを占領した。

フニャディ・ヤーノシュ摂政

|

|

ラスロー

|

マチャーシュ王

マチャーシュ1世（1443－1490、位1458－1490）は、ボヘミア王にもなった（位1469－1490）。彼はフニャディ・マチャーシュ、またはマティアス・コルヴィヌス、マチャーシュ・コルヴィン、フニャディ・マチャーシュと言われる。

マチャーシュの最初の妃はボヘミア王の娘カテジナ、つまりカッタリナで、1461年に結婚した。2番目がナポリ王の娘ベアトリーチェ、またはベアトリクスである。マチャーシュ1世にはこの二人の間に子はいない。だがマチャーシュ王には庶子がいた。コルヴィン・ヤーノシュ（1473－1504）である。

マチャーシュ王の年表

1456 父ヤーノシュ没。

1458 マチャーシュ、ハンガリー王になる。

1461 スロヴァキアのギュフク・ヤーノシュを破る。

1465 教皇からボヘミアの出兵を要請さる。

1468 ボヘミアへ出兵、モラヴィアを占領。

1471 ボヘミアに再出兵。

1479 オロモウツの和約で、ハプスブルクからオーストリアの支配権をえる、

1479年に、オーストリア大公国の支配権も得た。

1485 ウィーン占領。

1490 ウィーンで没。

マチャーシュ王の副王はサポヤイ・イシュトヴァーンであった。マチャーシュ王は1490年に急死した。その後、貴族たちが勢力を盛り返す。彼らは農民を農奴として扱い、そのため各地で反乱が起きる。代表例は1514年のドージャに率いられた農民一揆である。

ドージャ・ジェルジ（1470－1514）は、トランシルヴァニア出身である、反トルコ十字

軍の組織をハンガリー大法官に命じられ、農民軍を数十万人集めた。しかし地主勢力は、収穫期に帰郷しない彼らの妻子を虐待した。そのため農民は反乱した。ハンガリー王、ウラースロ2世時代である。

大司教バコーツは宮廷党を率いる。反乱鎮圧の後、ハンガリーでは、貴族の自由と農奴の隷属がきまった。

マチャーシュ王の2度目の妻が王妃ベアトリクスであった。次の王は、庶子コルヴィン・ヤーノシュの予定だったが、ならなかった。というのは異義が出たのだ。王妃ベアトリクス、マクシミリアン1世、ボヘミア王ヴラディスラフ、ポーランド王ヤゲロ家のヤン・オブラフトからである。

ヤン・オブラフトとマクシミリアン1世は武力で王位要求をしたが失敗した。だがウラディスラフはオーストリアを放棄し、マクシミリアン1世のハンガリー王位への権利を認めた。

議会は、ヤギェウ朝の国王を迎える。ヤギェウ家のポーランド王カジェミェシュ4世の長男であるボヘミア王ヴラディスラフ(=ウラースロー)がハンガリー国王となった(位1490-1516)。このウラースロー2世(1456-1516)は、ボヘミア王(位1471-1516)、にもなった。

ウラディスラフ(ウラースロー)は王妃としてベアトリクスを娶るとした。マチャーシュ王の2度目の妻で、前王妃である。ナポリ公アラゴンのフェランテの娘だった。だが、彼女はだまされて、結婚されず、帰国した。

ウラディスラフは、大貴族、大司教、司教に国庫を利用された。高僧・官僚が宮廷党をつくり、サポヤイ・イシュトヴァーンと大貴族は貴族党を作り、争った。サポヤイは王位を要求し、ウラディスラフの政府はハプスブルクに助けを求めた。ウラディスラス2世と宮廷党はハプスブルクに依存していた。

サポヤイが死ぬと、上の息子ヤーノシュが貴族党の指導者になった。

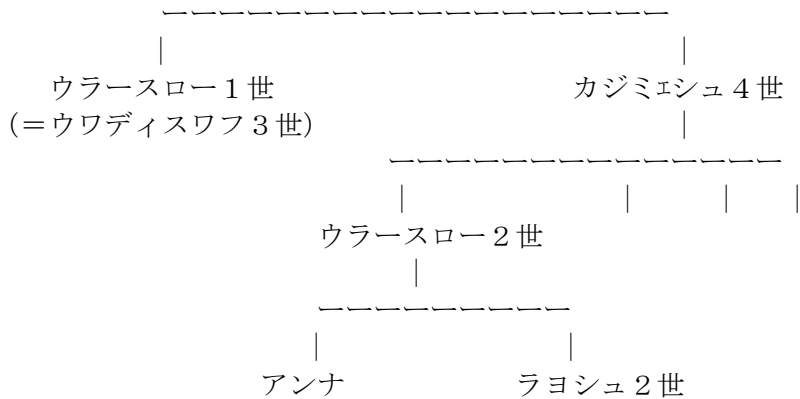
1506年、ウラディスラフに嫡子が生まれてしまった。

フッガー家はハプスブルクに大いに金を貸していた。初めチロルの銀鉱経営をした。フッガー家はハンガリーに食い込み、1494年、鋳物工場を多数設置した。フッガー家は鉛鉱を造った。ウラディスラスの王国の鉱山はフッガー家を富ませた。ハプスブルクとフッガー家が組んだ。両者はハンガリーとボヘミアで力を持ち、ヤギェウ家からハプスブルクへ王冠が移るのだった。

ヤギェウ朝は、初めはリトアニア大公、その後ポーランド王、ハンガリー王、ボヘミア王になる。ハンガリー王として、ウラースロー1世、2世、ラヨシュ2世がでたわけである。

ヤギェウ家のラヨシュ2世と妃マリアは愛し合った。ラヨシュ2世は10才で王になった。ハンガリー王(1516-1526)、そしてボヘミア王(同年)としてルドヴィーク1世と名乗った。

ハンガリーのヤギェウ朝系図



オスマン・トルコの皇帝、第 10 代皇帝スレイマン 1 世あるいは大帝（1494-1566、在位 1520-1566）（7）は、セリム 1 世の息である。スレイマンは、1520 年に父の後を継ぎ、即位した。妃の 1 人がヒュツレムであった。彼は 46 年の統治のうち、13 回も遠征した。法典を整備した。1521 年から外征を始めた。

1456 年以来国境を侵さなかったトルコが動いた。シレイマン 1 世の前にはオスマン・トルコはヨーロッパに背を向けていた。シレイマン 1 世が再びヨーロッパに向かった。1521 年、トルコはフニャディ・ヤーノシュが守り抜いたベオグラードを攻略した。ベオグラード（＝ナードルフェールヴァール）が墜ちる。ここにイエニチュリ（オスマン・トルコの近衛騎兵隊）を常駐させた。マチャーシュ王の死後、ハンガリー勢力は分裂していた。

皇帝スレイマンは、1521 年、ハンガリー王国に朝貢を要求し、毎年使者をオスマン帝国に送るよう求めた。それをラヨシュ 2 世ははねつけた。トルコの使者の首をはね、その首を送り返した。スレイマンは怒り、それからヨーロッパを攻め、ハンガリー王からベオグラードを奪うことになる。このころ彼は一方的にヴェネチアに増税を決め、ヴェネチアは怒っている。スレイマンはロードス島との戦いを優先し、1522 年にロードス島を奪う。これで東地中海の制海権を得た。義弟のイブラヒム・パシャを大宰相に抜擢し、イブラヒムも有能だった。ロードス島攻撃のため、ハンガリー攻撃は遅くなったが、1526 年、スレイマンはイスタンブールを出陣し、ハンガリーに進軍した。（8）

モハーチの戦い

1526 年、モハーチの戦いがおきた。トルコがハンガリー国境を越えて攻め込んだ。フェルディナントの義弟・ボヘミア王・ハンガリー王ラヨシュ 2 世は、対オスマン・トルコとの戦い、つまりモハッチの戦いに臨んだ。ハンガリー軍、ラヨシュ 2 世は 2 万 5 千の兵をもった。8 月 29 日激突した。モハーチ平原は、現ハンガリーの南端で、ドナウ河に沿っている。オスマンの軍は 6 万人であった。ラヨシュは、血気にはやり、援軍 2 万人を待たず、ハンガリーの伝統的な騎馬団で戦い、オスマン軍は大砲を 300 門持っていた。オス

マン軍はハンガリー騎士団をおびき出し、その後、大砲で攻撃した。トルコの砲火とイエニチェリの攻撃の前にハンガリー軍は壊滅した。16 時ころ始まり、戦闘は 1 時間半で決着がついた。ハンガリー軍が総崩れとなり、ラヨシュは撤退しようと、敗走した。チェレ河を渡ろうとし、馬から落ちて溺死した。この戦いでヤギェウオ家は断絶する。

フェルディナント 1 世

ハンガリー

モハーチの戦い後、トルコの驚異が増した。オスマン軍は、モハーチの戦いで勝利し、9 月、ブダを占領し、ハンガリー中部を占領した。ハンガリーは大部分がオスマンのものになり、一部がトランシルヴァニアのサヴォヤイ・ヤーノシュのものになり、残りの一部は、ハプスブルクのものになる。フェルディナントは義弟・ラヨシュ 2 世に代わり、ボヘミア王・ハンガリー王になった。これは、その後、ハプスブルクが東方帝国を得て、大帝国になるきっかけとなる。(9)

3 地域の分割は、中央部・南部をオスマン帝国ハンガリー、北部をハプスブルク領（王領ハンガリー）。東が東ハンガリー王国、ただしオスマンを宗主とする、となった。18 世紀には全域がハプスブルク領になるのだが。オスマン帝国以外に 2 王朝が対立した。

サヴォヤイ・ヤーノシュ（1487-1540、在位 1526-1540）は、トランシルヴァニアの豪族で、ハンガリー最大の貴族であり、1 世を名乗り、王位（対立王位）についた。父は、サポヤイ・イシュトヴァーンである。

バコーリの没後、副王バートリー・イシュトヴァーンが宮廷党を率いた。しかし副王とその宮廷党、マリア太后は、対立議会を招集し、フェルディナント（位 1526-64）を選出した。サポヤイはフランス王の支持を求めたが、援助を得られなかった。

フェルディナントは、フッガー家の資金で軍を組織し、サポヤイをハンガリーから追い出した。サポヤイはポーランド王のもとに逃げた。つぎにサポヤイはスルタン（トルコ）の庇護の下に入ることにし、シュレイマンは認めた。

フェルディナントが新しく二つの国王になったが、ハンガリーでは外国人フェルディナントが王位につくの嫌がった。オスマン軍はハンガリー中央部を平定した。トランシルヴァニア（＝ジューベンビュルゲン）の領主サポヤイ・ヤーノシュがハンガリー王として即位し、対立王となった。その際、オスマン帝国がその後ろ盾になった。だからトランシルヴァニアにはハプスブルクの力が及ばなかった。ハプスブルクと対峙したオスマン・トルコは、1529 年、ウィーンを包囲した。ハプスブルクもペルシャと手を組もうとした。

1529 年、シュレイマンは第一次ウィーン攻撃をし、占領できなかったが、サポヤイはトルコの庇護の下、ハンガリーに復帰した。フェルディナント派は小さくなった。ウィーン攻撃は成功しなかったが、東洋の大国がヨーロッパの入り口まで攻めてきたことは恐怖となった。1529 年のウィーン攻撃は、ハプスブルクがボヘミア王、ハンガリー王をとったからだ。1547 年まで休戦協定がされた。

以後 150 年、ハンガリーの中央から南部はトルコの支配下に入った。一方、ハンガリー王国は北西部だけ確保し、ポジョニ（スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ）に首都をおいた。フェルディナント 1 世がハンガリーとボヘミアの国王となる。ハンガリー東部はトル

コの保護の下、トランシルヴァニア公国を造った。1526-1699 年まで、ハンガリー中央部と南部はトルコが占領した。スルタンはブダに入城したが、すぐひきあげた。サポヤイ指揮下のハンガリー軍がまだ残っていたからだ。

サポヤイ・ヤーノシュとハプスブルクが統一すれば、トルコと戦えたが、共に王位の為に競った。ハンガリーはこうして、トルコとハプスブルク 2つの権力に挟まれた。

ラヨシュの妃 MARIA は、その後、再婚しなかった。彼女はネーダーランド総督になったことがある。フェルディナントとアンナは、この時代には珍しく、自分たちで子供を育てた。

スルタン（皇帝）は 1532 年にも再びオーストリアに遠征をおこなった。しかし補給線が伸びず、ウィーンまで進めない。その中でサポヤイとハプスブルクはお互いに戦っていた。だが 1533 年に和睦した。ハプスブルク側はヤーノシュの王位を認め、貢納金を支払うこととなった。

サヴォヤイ・ヤーノシュ 1 世は、イザベラと結婚し、1540 年に 1 人息子ヤーノシュ・ジグモンド（在位 1540-1571）が生まれ、本人はすぐ亡くなった。未亡人イザベラは、1550-1559 年にハンガリー女王を名乗った。幼子ヤーノシュ・ジグスムンドが国王（位 1540-71）になる。サポヤイの妻イサベラはポーランド王の娘である。ハンガリーを統治するのは、オスマンの支持をうけていたフラーデル・ジョルジ枢機卿と、母イサベラ（1559 年没）だった。

トルコのハンガリー攻撃は、1683 年まで何度か行われたが、ウィーンまで進めなかった。1538 年スレイマンは、スペイン、ヴェネチア、ローマ教皇、オーストリア連合艦隊をプレヴェザの海戦で破り、地中海の制海権を握った。スレイマン 1 世の時代、オスマンはマルタ島をとり、アルジェリア、チュニジアが帰属し、地中海の制海権はオスマンのものとなった。1541 年 ブダとベシュトもトルコ軍に占領される、

幼いヤーノシュ・ジグムンドが国王になると、1540 年、これに対してハプスブルクのフェルディナントはブダを攻囲した。1541 年、オーストリアはブダ奪回を試みた。だがことごとく失敗した。

1541 年、シュレイマンは、自分の庇護下の国王のために進軍した。ハプスブルクは退散し、ブダとハンガリー中西部はトルコの手に残った。

1547 年、カール 5 世と弟フェルディナント国王は、オスマン帝国と休戦し、和平した。このとき、課金を約束された。毎年 3 万ドカーテンを払うことになった。ハンガリーにプロテスタントがかなりいた。トランシルヴァニアにはハンガリー貴族のバートリ家が支配していた。

ハンガリー大貴族はこれで 2 大国、トルコとハプスブルクの道具になった。

東部ハンガリーがヤーノシュ・ジグムンドに割譲されたさい、トルコに年貢を納めることになった。幼い王の下で、クロアチア出の司祭マルティヌジ・ジョウジュが生前から国王サポヤイから妻と子の将来を託されていた。ハプスブルクは 1542 年、ブダを奪還に失敗する。マルティヌジはハプスブルクの分遣隊に殺された。トルコは復讐した。1552 年、トルコの大軍がハンガリーを攻めてきて、ほぼ支配下に置いた。1552 年以降は南ハンガリーはトルコ支配のままだった。

1556年、トランシルヴァニア議会はイザベラ太后とヤーノシュ・ジグムントを呼び出し、ほぼトランシルヴァニアだけの支配者とした。

1559年、イザベラ太后が没し、バートリー・イシュトヴァーンが国王の名の下で政治を握る。(10)ヤーノシュ・ジグムントは1570年にマクシミリアン2世の王位を認めた。彼は初代トランシルヴァニア公になった。彼は翌年死去し、後継争いが起きて、バートリー・イシュトヴァーン(1533-1586)がトランシルヴァニア王(1571-1586)になった。またの名シュテファン・バートリである。ポーランド・リトアニア共和国の共同統治者(位1576-1586)となる。

その後、スレイマンは、対サファヴィー朝に対し東方遠征をし、バグダッドを占領し、南イラクとアゼルバイジャンを取った。3回目の遠征で、アゼルバイジャンは失う。その責任をとらされ、宰相イブラヒムは処刑となった。アルジェのバルバリア海賊のハイレッディンが帰順し、スレイマンは彼をパシヤにし、アルジェが領土となった。これで西地中海の制海権も半分手に入った。

フェルディナントの治世

フェルディナントはハンガリー王になった。サポヤイ・ヤーノシュが他方でハンガリー王に立てられ、その後、その子が立てられる。

フェルディナント夫妻は4男11女をうむ。フェルディナントはいつもアンナと一緒にいた。浮気をしなかった。1547年、妃が産褥熱で死す。フェルディナントは、ショックで沈みがちになり、別人のようになった。

カール5世の皇帝軍がフィレンツェを包囲し、共和国フィレンツェは崩壊し、フィレンツェ公国となる。カール5世は、アレッシンドロ・メディチを初代フィレンツェ公にし、娘・庶子マルガレータを1535年に同公に嫁がせた、しかし1537年、公が従弟のロレンツイーノに暗殺され、彼女は15才で寡婦になった。その後、パルマのオッタヴィオ・ファルネーゼと1542年に再婚させた。彼女は建築好きであった。ピアツェンツァにパラッツォを作るが、未完成となった。1559年にネーダーランドの総督に任命される。

その後、マルガレータの息子アレッシンドロ・ファルネーゼはレパントの海戦で將軍の1人として参戦した。その時の最高指揮官はドン・ファン・デ・アウストリア(11)である。彼もカールの庶子である。後年、ドン・ファンがネーダーランド総督になり、ファルネーゼは1577年に彼のもとに赴任した。ドン・ファンが急死し、後任になる。だが1591年に死んだ。

フェルディナントは、プラハにベルヴェデーレ宮を1538年から建てる。これは愛する妃のためであった。彼は、カール5世が引退した時から神聖ローマ帝国皇帝(1556-64)になり、フェルディナント1世を名乗る。その後、後継はフェリペ2世(カールの息子)にせよという兄カールとの約束を破る。

フェリペ2世は、初めマリア・マヌエラと結婚し、いとも同士であり、愛し合った。ドン・カルロスが生まれ、マリアはすぐ病死する。その後、フェリペ2世は、カールの命令で、イングランドのメアリー1世と結婚し、メアリーも病死する。彼はそこでエリザベス

いとこ同士である。1548年9月。カールもその結婚式に列席した。

1548年にマクシリアンはマリアと結婚し、その直後から3年間、カルロスのない間、スペイン総督であった。彼はオーストリアへ帰国後、ルター派に傾いた。彼は新旧両派の和解に勤めた。トレント公会議の決議の公布を拒否した。

1551年 カール5世、弟フェルデヨナント1世、妹マリア、フェリペ2世の4人は、アウグスブルグで長い協議をした。このマリアはネーデルラント総督で、前ハンガリー王妃、ボヘミア王妃であった。皇帝位を交互に継承することをきめた。カール5世・ローマ王は、フェルディナント1世の後は皇帝位をフェリペ2世へ渡すようにと約束させていたが、フェルディナント1世は反古にするわけだった。彼はオーストリア系ハプスブルクの祖になる。カールもフェルディナントも容貌はハプスブルク風で、下顎が豊かだった。

1547年の市民反乱がプラハで起きた。フェルディナント1世は、1547年反乱の後、2つの手を打った。1561年にプラハ大司教座を復活させ、プラハでイエズス会・アカデミーの設立にとりかかった。(14)

1556年 ボヘミアにジェズイット派修道院が設立される。1561年 プラハ大司教区が再建される。フェルディナント1世は、勅令・信仰の自由を出す。彼は1562年、オスマン帝国との和平を結ぶ。1563年、プラハ最初の本格的ルネサンス的宮殿建築、ベルベデーレ離宮を国王フェルディナント1世が建てる。フェルディナント1世は主にウィーンにいたが、次男フェルディナントをチェコの総督にした。

1562年に息子マクシミリアンはボヘミア王に、同年、ローマ王に、63年ハンガリー王になり、フェルディナント1世はその翌年64年に死んだ。そしてマクシミリアンが2世として皇帝になる。死の前から少しづつ譲っていた。

オーストリア・ハプスブルクとスペイン・ハプスブルクに争いがある、皇帝位はフェリペ2世でなく、マクシミリアン2世が継いだ。

マクシミリアン2世 (1527-1576)

マクシミリアン2世の妻は、マリアで、カール5世の娘、つまりいとこである。

皇帝・国王マクシミリアン2世(在位 1564-76)は、ウィーン生まれで、インスブルックで過ごし、17才で伯父カール5世がその宮廷に呼んだ。スペインで教育を受けたが、プロテスタントに寛容になった。マクシミリアンは、スペインでマリアと1548年に結婚した。マリア・フォン・シュパニエンといわれた人である。マリアはカール5世の娘なので、いとこである。彼らの子供たちについて順番に言えば、アンナ(1549-80)は、フェリペ2世の妃になった。何といとこの子である。フェルディナントは早世した。ルドルフ2世が続いた。エルンスト(1553-95)は、ネーデルラント総督になった。エリザベトは、フランス王シャルル9世妃になった。マリーは早世した。マティアスはルドルフの次に皇帝になった。次いで男子が死産した。マクシミリアンが生まれた。アルブレヒトはネーデルラント総督になった。ヴェンツェル、フリートリヒ、マリア、カールは早世した。マルガレータは修道女になった。エレオノーレは長生きした。10人が12歳以上生きた。マリアとマクシミリアン2世は多産であった。2人は宗教上意見が対立した。

1551年にマクシミリアン2世はウィーンへ来る。マクシミリアンは1566年に市内に上

水道の敷設を命じた。1526年、都市秩序法が制定され、市民は国王に従属していた。

マクシミリアン2世は、プロテスタントに好意的との噂があった。彼はルター派に共感した。それでフス派は、国内でプロテスタントの存在を公式に認める「チェコの信仰告白」を作り、1575年にこれを提出し、正式承認を求めた。マクシミリアン2世は国王としてそれを受け入れるわけにゆかなかった。「カトリックでなくても自由な信仰を妨げられない」と口頭で宣言しただけだった。

マクシミリアン2世は、学問好きで、語学に堪能だった。プロテスタント好みだったが、父が廃嫡すると言って、禁じられた。だが彼の治世の間、プロテスタントが増える。

フェリペ2世は、フェルディナントの息子マクシミリアン2世のその2人の息子ルドルフとエルンスト、つまりフェルディナントの孫である2人の教育を監督した。マクシミリアンみたいになっては困る、しっかりカトリックであってほしいからであった。彼は1561年にマドリドを首都とした。それまでスペインの宮廷は移動していた。ルドルフ兄弟が来たのは、1565年であった。

ルドルフのマドリド滞在中にネーデルランド反乱が起きた。マクシミリアン2世は、エグモント、ホールネーの処刑の、助命嘆願をフェリペ2世に頼み、息子ルドルフにもそれを伝えよと手紙を書いた。だが実現しない。

2人兄弟がウィーンへ帰る年、1571年にレパントの戦いが起きた。

フェリペ2世はエリザベトとの間にできた娘イサベルを、ルドルフと婚約させた。

ルドルフとエルンスト、2人の兄弟がウィーンへ帰ると、入れ替わるように、弟アルブレヒト大公とヴェンツェル大公がアンナ大公女とともにスペインへやってきた。アンナは長女で、ルドルフの姉である。彼女はフェリペ2世と結婚するためにやってきた。

エリザベト妃の病死后、フェリペ2世は、このアナあるいはアンナ・デ・アウストリア、つまりマクシミリアン2世の娘と1570年に結婚した。いとこの子である。43才と21才であった。年が随分違う。彼女はフェリペ3世を生む。

パルマ妃、つまり前出のカール5世の庶子が、ネーデルランドの総督として派遣され、1566年、暴動で帰国した。彼女の手には負えないのだった。パルマ妃の後任として、アルバ公が派遣された。

1555年、アウグスブルグの宗教和議がなされた。1555年から1618年のディフェネストラーション（窓外放擲事件）が1つの時代だった。

1565年、マクシミリアン2世の妹ジョアンナは、フィレンツェのトスカナ公フランチェスコ1世と結婚した。

1565年からマクシミリアン2世はトルコ・スルタンへの毎年3万ドカーテンの貢税支払いを拒否した。またトランシルヴァニアの放棄を要求した。そこでスレイマン1世は激怒し、1566年、10万の兵で再びイスタンブールを出陣した、72才だった、4月末、ハンガリーに進軍し、ハンガリー攻撃をはじめた。マクシミリアン2世は5万の歩兵と3万の騎兵で8月に出陣した。シュレイマンの最後のハンガリー攻撃がされた。シゲトヴァールの戦いである。ところが老スレイマン（1494-1568）はシゲトヴァール城塞包囲の最中、9月5日、陣中で急死する。それは秘密にされ、トルコは城塞を攻撃し、占拠した。そこでさらなる攻撃は辞めた。

1566年、新スルタン・セリム2世は、征服をしなかった、その力がなかった。1568年アドリアノーブルの和約がなされた。セリム2世とハンガリー王マクシミリアン2世の間であり、ハンガリーの長期の分割を認めた。

トルコはかつて初め1529年にウィーン包囲をしたことがあった。後年、トルコは1683年に二度目のウィーン包囲をする。

マクシミリアンは、神聖ローマ帝国皇帝（在位1564-76）であった。プロテスタントに宗教の自由を認めようとしたが、スペインの反対でできなかった。彼は死に際、カトリックの秘蹟を拒否した。

1569年、教皇ピウス5世は、コジモ1世・トスカナ公を大公にすると勅書を出した。それにマクシミリアン2世やイタリア諸侯は反発した。1570年、教皇はローマで公に大公冠を授与した。

1570年 スペイエル協定でヤーノシュ・ジグモン트는、ハンガリー王の称号を捨て、トランシルヴァニア公、兼ハンガリー分離地区宗主となった。

1571年に彼が没し、新トランシルヴァニア公にバートリが選ばれた。

1580年 スペインはポルトガルを併合した。

マクシミリアン2世の弟フェルディナント大公（1529-95）は、1556年、プラハに金星館を建てる。またこの大公はインスブルックにクンスト・カマーを作った。

ちなみにフェリペ2世とマクシミリアン2世は同年生まれである。

アルチンボルドは、フェルディナント1世の宮廷画家だったが、そのまま宮廷画家になる。フェルディナント1世もマクシミリアン2世も、ギリシャ、ローマのコインの蒐集家だった。

マクシミリアン2世は、ヤコボ・ストラダ(1507 - 1588)を1557年に引見した。彼はイタリアの画家、建築家、金細工師、骨董商、古代芸術品の目利きであった。1558年からストラダはウィーン宮廷へ出入りし、1560年、フェルディナント1世により正式の宮廷建築家になった。彼はこうしてマクシミリアン2世にも引き続き任じられる。ストラダは宮廷古美術専門家で、建築家である。

マクシミリアン2世には宮廷建築家が4人いた。うちピエトロ・フェラボスコは3代仕えた。

バルトロトス・スプランゲル(1546-1611)は、ネーダーランド、ブラバント公国アントウエルペン出身の画家で、そこで修行した。北方マニエリスムの代表的美術家である。生地ではスプランヘルであろう。ローマに出、マニエリスムを学ぶ。マクシミリアン2世に招かれて1575年に弟子ハンス・モストとウィーンへ来て、宮廷画家となる。その後、ルドルフ2世の宮廷にも仕え、彼と共にプラハに来た。そしてここで没した。3代の皇帝に仕えた中で有名である。代表作は「サルマキスとヘルマフロディトス」c.1580年（ウィーン美術史美術館蔵）、「ヴィーナスとアドニス」である。女性の美しさを官能的に描いた。婦像が得意で、優美である。ギリシャ神話の題材が多い。（15）

マクシミリアン2世は、フィチーノの著作を読んでいた。彼は人文主義者だった。彼は古典ローマの文献をよく読んだ。宮廷に多くの学者を招き、子供たちにラテン語を学ばせた。ルドルフとエルンストは、ラテン語作家テレンティウスを読んだ。ルドルフ2世も古

典ローマの文献をよく読んだ。

マクシミリアン2世は、娘エリザベトをフランス王シャルル9世に嫁がせていた。フェリペ2世は反対していた。シャルル9世の没後、エリザベトはウィーンに移った。

マクシミリアン2世は、ウィーンの北東70キロ、エバースドルフに館を再建し、ノイゲボイデ（新邸宅）を作る。彼は庭園と園芸が好きだった。

マクシミリアン2世は、宗教対立を何とか調停しようとした。

フェルディナント1世は宮廷楽団を再編した。マクシミリアン2世もそれを充実させた。

マクシミリアン2世は、死ぬ前長い間、病気であった。通風は、カール5世、カレル4世、フランソワ1世、シュレイマンがかかっていた。

マクシミリアン2世は、植物学に関心を持ち、植物学者を招く。駐オスマン、オーストリア大使オギエル・ギスラン・ド・ブスベクが、チューリップ、ヒヤシンス、ライラックを、ウィーンに持ち帰った。フランス出身のシャルル・ド・レクリューズ（クルシウス）は、16世紀の園芸に最も影響力のあった植物学者で、1573年にマクシミリアン2世の薬園に雇われ、ウィーンにマロニエの木を持ち込み、ブスベクが持ち帰ったチューリップ、ヒヤシンスなどを育てた。オーストリアの鉱山にのぼって調査した。1576年、次のルドルフ2世の即位後、解雇され、ネーダーランドに戻り、ライデン大学の教授になる。ライデン大学植物園の設立に尽力し。オランダでチューリップの品種改良をし、オランダをチューリップで有名にする。

マクシミリアン2世はプロテスタントでもなく、カトリックでもなく、が信条だった。

皇帝カレル4世の、金印勅書1356年で定めた皇帝選挙規定は、マインツ、トリーア、ケルンの司教・大司教と、プファルツ、ブラウンシュヴァイク、ザクセン、ボヘミアの諸侯による選挙であった。

1576年、レーゲンスブルグでマクシミリアン2世が死去し、そこでルドルフ2世が皇帝に選ばれる。ルドルフ2世はボヘミア王だから自動的に1票入る。

ルドルフ2世 (1552-1612)

ルドルフ2世はウィーン生れで、ルドルフの母はカール5世の娘 maria である。フェリペ2世の要望と、母の強い奨めで、彼は幼少時代、10代をスペインの宮廷で過した。父マクシミリアンがプロテスタント寄りになったので、フェリペ2世はそれを恐れ、スペインに來させたのであった。12才でフェリペ2世のもとに行った。弟エルンストと一緒にあって、家庭教師アダム・フォン・ディートリヒシュタインに伴われた。この人は後にルドルフの宮内庁長官となり、彼の有力な側近になる。ルドルフは19才までスペインでイエズス会の教育を受けさせる。そのため、カトリックの影響が強かった。フェリペ2世は伯父であり、母の兄である。父マクシミリアン2世とその妃 maria はいとこ同士である。ハプスブルクでよくある縁組みであった。ルドルフは後に6か国語ができるようになる。

ルドルフはマクシミリアン1世もカール5世も知っていたから、継承の意味が大きかった。ルドルフ2世は、1572年にハンガリー王になる。といってもオスマン帝国に占領されていたから、一部だった。1575年、23才でボヘミア王になる。この2つの戴冠式をア

ルチンボルトがデザインした。彼はフェルディナント1世の時代から仕えていた。1576年、ルドルフ2世は皇帝になる。アルチンボルトもそのまま宮廷画家になる。

ルドルフが生まれたのは、マゼラン遠征（1519-22）の一世代後であり、世界の国王たるフェリペ2世の治下である。新大陸が発見され、東洋に達し、世界一周が行われ、地球全体に関心が寄せられた。ルドルフは広く全世界の風物に関心を持った。

ルドルフは、父の死後、オーストリアへ戻った。ルドルフ2世は7年間ウィーンを治める。そして鬱病になる。統合失調症ではないか、とされる。ルドルフも下あごが豊かだった。ハプスブルクの遺伝である。

ルドルフ2世は1578年に大病、胃炎を患った。転地療養で、アルチンボルトらとプラハへ行った。そこでは解放された気分となった。ウィーンはトルコの脅威もあった。そこでひそかに移転を準備する。1583年、ルドルフ2世は、宮廷をプラハに遷都した。33才だった。アルチンボルトも同伴した。ルドルフ2世は、ウィーンよりプラハの空気の方が合っているのだから、遷都した。ウィーンは因習に捕らわれているのだった。オーストリアの統治は弟エルンストに任した。

ルドルフがウィーンからプラハに移ることは、マクシミリアンの死の時にすでに考えていた。当時は首都概念が違っていた。そしてウィーン近くの町にトルコが攻め込んだ。そしてチェコ人の要請があった。彼は皇帝として、1578-1583年がウィーン、1583-1612年がプラハの時代である。プラハ時代の方が長い。

父マクシミリアン2世は、気さくで、誰とでも打ち解けて話す人だった。ルドルフ2世は、それに較べて口数がすくなく、気難しいとされた。スペイン風だったかららしい。

1600年前後の数年間にヨーロッパでは転換期があった。（16）

この頃、トリエント公会議の存在が大きかった。これは1545から1563年に断続的に開かれた。教皇の至上権が決まり、宗教改革に対抗した。トリエントは現在はイタリアにある。教皇パウルス3世が開き、カール5世が要請した。だんだん反宗教改革的になっていった。ルター主義に反対した。第2期ではフェルディナント1世も係わり、アウグスブルグの和議が成立した。ドイツでの解決であった。全体の結果としてはカトリックとプロテスタントが分裂した。

ルドルフは、世界最高水準の芸術作品を、そして大航海時代によってもたらされた、珍しい動物や鳥や草花、望遠鏡、科学技術器機、鉱物、金銀細工を求めた。彼は、芸術と自然の探求に非常に身を入れた。錬金術師の実験室、画家のアトリエ、時計職人の工房が彼の関心であった。これら学問への異常な熱意のため、普通の人間ではなくなった。ルドルフの人格に遺伝的要素があった。8年間のスペイン体験も大きかった。ルドルフはスペインの尊大さを嫌った。ルドルフは、王者の威厳を保とうとした。弟たちにも服従を要求した。臣下にも威信を保った。ルドルフ2世は、ドイツ・ルネッサンスのアルブレヒト・デュラーとティチアーノの作品を入手しようとする。

スペインの従妹イサベラが、嫁の候補に挙がった。だが縁談がならず、ルドルフの弟と結婚する。ルドルフにはマリア・デ・メディチとも縁談あったが、アンリ4世と結婚した。

ルドルフは、ルンプフ、式部長官トララトゾンに側近にしたが、凡庸なので、不満を抱いた。1600年とうとう怒り、宮廷から永久追放した。リヒテンシュタインが宮内長官に

なった。ボヘミア大貴族は、リジウムベルグ家、ベルンシュタイン家、フラデツ家、ディートリヒシュタイン家、ハルクフ家、ロブコヴィッツ家である。

16世紀後半、帝国行政は、1、ルドルフが連れてきた人びとと、2、伝統的ボヘミア王国行政が、併存していた。官僚組織の頂点には、宮内長官、財務長官、式部長官、軍事長官の4人が居り、中でも宮内長官が重要であった。1576年には古くからのルドルフの傅育官アダム・フォン・ディートリヒシュタインが勤めた。(17)有力名家はほとんど官僚を出していた。晩年ルドルフは、カール・フォン・リヒテンシュタインを重用した。

プラハに常駐大使が置かれていたのは、マドリド、ローマ、コンスタンティノープル、ヴェネチア、時にパリ。だけだった。この時期、トルコの驚異があった。1591-1606年、ハンガリーでオスマン帝国の攻撃があった。

当時の社会思想としては、フランシスコ・パトリーツイ(1597)は、アリストテレス攻撃をし、『新世界哲学』『至福の都』を出す。ジョルダナーノ・ブルーノはヘルメス主義による世界改革を考える。イタリアのルネッサンス的全体主義の頂点はカンパネラで、千年王国信仰を持つ。ガスパル・ショッペが1598年にプラハに迎えられた。

1576年のマクシミリアン2世の死の時、ボヘミア王領に約400万人の人口であった。ルドルフが来た時、プラハは人口5万だった。

ボヘミアで1547年にプロテスタントによる反帝国支配反乱がおき、鎮圧された。

チェコ同胞団はルドルフ2世時代に活躍した。カトリックともルター派とも強調しない宗教的急進派だった。ボヘミア王領で再洗礼派が容認され、1万人を越えていた。

ルドルフが君主であった間、ボヘミア王国では住民は長年に亘ってどんな宗教的放埒さもやめさせられなかった。皆が最も望ましい宗教を考え出し、信仰していた。

1576年にカトリックは人口の約10%だった。ルドルフ2世は、徹底的にプロテスタントを弾圧した。そこで反発される。特にハンガリーでであった。やむなく1606年に信教の自由を認めた。しかし1608年にハンガリーで大反乱がおき、弟マティアスにハンガリー王位を譲った。1609年にボヘミアの信教の自由を認めた。理解者・弟・エルンストが亡くなった。ルドルフ2世は自殺の計画もしたことがある。弟マティアスを憎んだ。ルドルフはマティアスの結婚を認めない。

ルドルフ2世はプラハへ遷都して、錬金術に狂気のようにのめり込む。ブラーエ、ケプラーを雇う。彼は結婚しない。だがもちろん愛人がいた。子はいた。長子は、殺人を犯し、父に先立ち死ぬ。

ルドルフは、ヴンダー・カマー(驚異の部屋)をプラハで作り、これがヨーロッパで代表的なものとなった。彼は教養に富んでいた。多数の芸術家、学者を集めた。ルーランド・サーフェリー(18)(ネーダーランドの画家)、ハンス・フォン・アーヘン(1552-1615)、アドリアン・デ・フリース、アルチンボルド、植物学者シャルル・ド・レクリューズである。

ルーランド・サーフェリー(1576/8-1639)は、現ベルギーのコルトレイクで、画家一家に生まれた。ハーレムにいた兄ヤーコプの弟子となる。1604年、ルドルフに招かれ、宮廷画家となり、プラハへ行く。鳥獣画を得意とした。皇帝の死後は、主にユトレヒトに住む。オランダのマニエリスム画家である。

ルドルフはデューラーの絵を愛した。

アーヘンは、ルドルフ2世の最もポピュラーな肖像画の書き手であり、前出スプランヘルの影響を受けた。ケルン生まれ、フランドル画家イエリクの門弟になる。ドイツで学び、イタリアへ移る。マニエリスムのヴェネチアに住む。ドイツ芸術界の首位にいるのは、スプランヘル、ヘンドリック・ホリツイウスだった。そしてドイツへ行く。1592年、ルドルフ2世の宮廷画家になる。1601年にプラハに行く。そこでルドルフ2世やマティアスに命令されて画作した。作に「寓話、または正義の勝利」がある。

フリースはルドルフ2世胸像を作った。ルドルフ2世はチェコのガラス工芸を世界的レベルに発展させた。ルドルフ2世のもと、プラハは国際マニエリズムの中心になり、発展した。

ルドルフ2世は、1581年、プラハで宮廷彫刻家としてモストを任命し、彼はその後イタリアへ帰る。天文学者タデウス・ハイエク（1525-1600）は、フェルディナント1世、マクシミリアン2世の侍医で、錬金術師であり、ルドルフ2世の侍医でもあった。ルドルフ2世は皇帝冠をもう1つ作る。

プラハで1587-1606年、宮廷金細工師フェルメイエンが仕える。他の名工はシュヴァインベルガー、フェアネン、セムニッツアーである。ルドルフ2世はヒエロニムス・ボッシュを蒐集した。宮廷画家バルトロメウス・スプランヘル（ベルギー出身の画家、マニエリスム）、宮廷彫刻家ハンス・モスト、2人はマクシミリアン2世に仕えた。ルドルフも2人を登用した。

マニエリスム

マニエリスムとは、盛期ルネッサンスと初期バロックの間のイタリアを中心とした全ヨーロッパの芸術様式である、絵画と建築である。1520年から16世紀末にかけて、ローマ、フィレンツェを中心に、ヨーロッパ全体に広がった。ジョルジュ・ヴァザーリ、エル・グレコ、アルチンボルドらが有名である。錯綜とした空間、非現実的な色彩、幻想的な描写、極度の技巧、作為性を特徴とする。騙し絵も出た。

錬金術

錬金術は、化学的手段を使って、卑金属から貴金属を精錬しようという試みである。紀元前のエジプトのアレクサンドリアで起こり、イスラームに伝わった。12世紀にイスラーム錬金術がラテン語訳されると、ヨーロッパで研究がされた。錬金術は化学を生み出した。

ヨーロッパの有名人は、アルベルトゥス・マグヌス（c.1193-1280）である。ドイツのシュヴァーベン生まれで、貴族、神学者。パドヴァ大で学ぶ、ドミニコ会員になる。ボローニアで学ぶ。アリストテレスの研究者である。錬金術を実践した。聖人となる。普遍博士、教会博士となる。トマス・アクイナスの師である。パリ大学、ケルンで教える。アリストテレス思想を受け入れる。自然学を推し進めた。著作は、『鉱物学』『錬金術に関する小冊子』がある。ヒ素の発見者といわれる。ケルンで没した。

ルネッサンス期の有名人にはパラケルスス(19)がおり、不老長寿薬の発見を目的にした。パラケルスス（1493-1541）は、スイス出身、アインジーデルンに生まれ、オーストリアで基礎教育を受ける。父・放浪の医師から教わる。1510年、バーゼル大学で学び、

フェラーラ大医学部に入学、医学博士。医師、化学者、錬金術師、神秘思想家である。大学での学問に失望した。各地を遍歴して学ぶ方が有効だと考えた。生涯放浪した。1516-26年、ウィーン、ケルン、パリ、モンペリエを遍歴。パラケルススを自称した。1524年、ザルツブルグで農民鉞夫連合軍を扇動した。1526年、バーゼル大医学部教授となり、教える。錬金術を研究し、医学に化学を導入した。梅毒など研究し、当時、ユソウボクが梅毒に効果があるとされたが、ないことを明らかにし、それで儲けていたフッガー家を敵に回した。アヘン剤を開発した。エラスムスの治療をした。ラテン語でなくドイツ語で講義をした。1528年、大学を追放された。1541年、ザルツブルグで47才で没した。本名はテオフラトス・ホーエンハイムといい、カトリックである。

錬金術はインドや中国にもあった。錬金術の最大の目的は賢者の石を見つけることだった。ヘルメス・トリスメギストスは錬金術の始祖で、守護神とされた。ヨーロッパ中からプラハに魔術師が集まったが、どれもいかさまだった。

当時有名な錬金術師は、エドワード・ケリーとイギリスのジョン・ディーだった。ケリーはルドルフに呼ばれた。センチヴィも有名だった。ジョン・ディーは、(1527-1608または09) (20) , ケンブリッジ大卒の修士、ルーヴァン大に学ぶ、パリ大で講師、イギリスへ帰国する。水晶玉透視をした。1583年からエドワード・ケリーとポーランド、ボヘミアを遍歴する。

エドワード・ケリーは1555年にイギリスのウスターで生まれ、水晶透視者になった。ジョン・ディーの弟子だった。ディーとともにボヘミア伯ウィレム・ローゼンベルグの保護を受けた。ディーは帰国し、ケリーは裕福になり、錬金術師として有名になった。ルドルフ2世は彼を雇い、大量に金を聖餐させようとした。ケリーはなかなか首をふらないので、1591年、捕まえて拘留した。ルドルフは彼が金を作れると信じていた。1594年、ケリーは同意したので、釈放した。しかし彼は当然ながら金の生産に失敗し、また監禁され、脱獄に失敗して死んだ。ジョン・ディー、エドワード・ケリーは、エリザベス1世のスパイだった。ディーは帰国してエリザベス1世に歓迎された。だがその後、ジェームズ1世時代には彼が魔術を嫌ったので、冷遇された。

ルドルフ2世は、世界中からあらゆるものを蒐集した。カルトルッチ一族をプラハにより寄せた。動物園も持った。彼は、プラハ城を増改築する。そのうち、スペイン広間には、蒐集した絵画、新広間は彫刻などが収められた。大航海時代の幕開けで、未知の世界から進取の動植物や珍品を求めた。

対トルコでは外交によって治世の初めの15年は穏やかだった。だが1592-1608年にトルコ戦争があった。1594年にブダとウィーンの間ラープ城塞がトルコに奪われる。將軍ハルデック伯は城を明け渡した。そのため死刑となる。1598年にラープ城を奪還する。弟エルンストが死んだ。彼も芸術好きで、絵を収集した。彼は1593-95年、ネーダーランド統治をした。

ルドルフ2世は、天文・博物のコレクターで、文化・芸術・科学のパトロンだった。彼

は、ヤン・ブリューゲル（父）「陶製の花瓶に生けられた小さな花」を持った。ルドルフは多くの時間をコレクションに捧げた。彼の高い知性、学問の深さと広さ、多くの言語の習得をした。プラハを後期ルネッサンスとマニエリスムの都にした。

プラハの名声は、画家ハンス・フォン・アーヘン、アルチンボルド、彫刻家アドリアン・ド・フリースによって作られた。

アドリアン・ド・フリース（Adriaen de Vries、c. 1545 または 46 — 1626）は、ルドルフ 2 世の胸像を作った。ハーグうまれで、彫刻家、特にブロンズのスペシャリストだった。1601 年にルドルフに呼ばれた、プラハ?のクンスト・カマーに作品類を作った。ルドルフの後、マティアスに仕え、その後、シャウンブルグ・ホルシュタインや、デンマークのクリスチャン 4 世王のもとに勤めた。

ハンス・フォン・アーヘン（1552 - 1615）は、ケルンうまれ、ドイツで絵を学び、イタリアへ移り、ヴェネチアに住んだ。スプランヘルやホルツイウスの画風に影響された。1588 年ドイツへ、1592 年ルドルフの宮廷画伯になる。しかし 1601 年にプラハに移った。作品には『寓話または正義の勝利』がある。

ストラダの 3000 巻の蔵書をルドルフ 2 世は買った。ヤコポ・ストラダ（1507—プラハ 1588）はマクシミリアン 2 世の宮廷を去った。彼は、イタリアの学者、画家、建築家、文筆家、美術収集家である。息子のオッタヴィオをルドルフ 2 世は、宮廷美術専門家に任じた。ルドルフは艶福家だった。画家オッタヴィオ・ストラダの娘カテリーナ・ストラドヴァ（1578—1629）がルドルフ 2 世の愛人だった。伯爵の身分をあたえられた。長男はドン・ジュリオ、あるいはジュリアス・シーザーである。続いてマティアス（—1619）、カルロス（—1650）、娘が、ドロテア、エリザベート、カロリーナである。オッタヴィオ・ストラダは同名の子があり、だからカテリーナはその妹である。彼女はウィーンで教育を受け、15 歳でルドルフの愛人になった、

ルドルフ 2 世は、カタリーナ・ストラダが愛人だったが、ときおり浮気をした。彼女は、ルドルフのコレクションの管理者、ヤコブ・ストラダ・オブ・ロスベルグ（オッタヴィオのこと）の娘だった。彼女はルドルフとの間に 6 人の子をなした。娘 2 人は修道院へ入り、3 人目はコンテクロイ伯と結婚した。息子の 1 人は 1619 年に死、もう 1 人は 30 年戦争を生き延びた。

ルドルフの長男

悪名高いもう 1 人の長男は、ドン・ユリウス・カエサル・ドーストリアという。ルドルフは彼に期待し、教育も配慮した。しかし長じてから、コントロールできなくなった。彼は酒におぼれた。ルドルフは矯正させようと努力したが、無駄に終わった。そこで 1606 年、オーストリアのカルトジオ派の修道院に投獄した。この攻撃的な若者は、武器の携行を許されず、年所得も厳しく制限され、ワイン一口、ビールとシナモン香りの水しかゆるされなかった。ユリウスはこの厳しい仕組みに数週間しか堪えられなかった。同年 11 月、彼は贅沢なチェスキー・クルムロフ（21）の城に住み着いた。これはルドルフ 2 世が 17 世紀初めにペトル・フォク・ロズムベルクから買った物だった。

ドン・ユリウスは、すぐこの町の恐怖になった。皇帝の庶子が着いて 1 ヶ月ご、地方議

会は彼の行動に不平を書いていた、しかし皇帝はたぶんそれを受け取っていないだろう。ドン・ユリウスは狂気であった。チェスキ・クルムロフの風呂屋の娘、マルケタ、あるいはマリエ・ピチロヴァが彼の愛人になった。この墮落した少年はサディスティックな傾向があった。過激となって彼女を何回も切ったので彼女は意識を失った。それを城の窓から投げ出したが、ガラクタの上だったので、命が助かった。彼女が回復し、もちろんこんな攻撃の敵に会いたくなかったが、ドン・ユリウスは彼女の母を無理強いして、娘を城へ連れてこさせた。1602年2月18日、この若い男は少女を殺し、その身体を切り刻み、棺の中に入れ、自分の手で槌で回りを打った。彼は、愛人を地方の修道院に埋葬するよう命じたが、その血濡れた犯行後4日も洗わず、着物と身体には犠牲者の血がついたままだった。

皇帝は断固介入し、城の監獄に彼を入れ、隔離した。そこでユリウスは1609年6月25日に死んだ。(22)

弟マティアスは、気性が激しく、行動的で、思慮が浅い。19才の時、ネーダーランドの総督に招聘されたので、なるという。1577年 マティアスがネーダーランド総督の座に着こうとして、フェリペ2世は怒った。ルドルフ2世も怒った。78年に就任し、81年まで勤めた。マティアスはうまくゆかなかった。その後はエルンストが勤めた。ルドルフ2世の弟アルプレヒト大公(1559-1621)もネーダーランド総督(1596-1621年)になった。

ルドルフ2世は、ライオンや豹を飼い、毎朝、ライオンに餌を与えた。ルドルフ2世は、別荘として金星館を使った。だがブランダイス城が好きだった。狩猟のためだった。ここへティコ・ブラーエもやってきた。

ルーベンスとヤン・ブリューゲル(ピーテルの次男)とは宮廷画家だった。

マクシミリアン2世の後、ルドルフ2世が引き継いで、ノイゲボイデの建設をつづけるが、完成しなかった。ノイゲボイデに動物園があった。後、シェーンブルンに移る。

ルドルフ2世は国政を大臣に任せていた。彼には政治能力に欠けていた。父がいる時、すでにハンガリーとボヘミアの王位についていた。

ルドルフはチェスキー・クルムロフの城を買った。錬金術師たちがここに集まった。

プラハにペストが広がり始めた時、ティコ・ブラーエとルドルフはブランダイス城へ避けた。

タデアーシュ・ハーイエクは、医師で、天文学者。マクシミリアン2世とルドルフ2世に仕え、チコやケプラーを招いた人である。ヨハネス・サンプクスは、マクシミリアン2世に引き継ぎ、ルドルフ2世の宮廷修史官となった。

ルドルフ2世が雇った、あるいは頼りにした有名な4人を簡単に見ておく。

ティコ・ブラーエ

ティコ・ブラーエ Tycho Brahe (1546 -1601) は、デンマークの貴族に生まれ、長男だったが伯父に育てられる。コペンハーゲン大学に入り、天文学に興味を持ち、トレミーの「アルマゲスト」やコペルニクスの「天体の回転について」を読んだ。ライプチヒ大学へ法学のために転学させられたが、天文学の興味は失せず。伯父がなくなり、自由になる。学友と決闘して、鼻先を切り落とされた。若い頃ある女のことで決闘になり、鼻を失なっ

たが、真鍮の鼻を着けた。占星術を信じた。トルコのスルタンの死をあてて有名に成り、錬金術にも没頭した。新星がでて、「デ・ノバ・ステルス」を書いて評判になる。わざと、貴族の娘でなく、一般の娘と結婚する。デンマーク王フレデリック 2 世が召し抱えることになり、1576 年、ベーン島を与え、テヨコのために大きな天文台を作った。国王はふんだんに資金を投入した。ティコはそれで観測装置を集めた。ティコは地動説を証明しようとしたが、できなかった。フレデリック 2 世がなくなり、後継のクリスチャン 4 世が援助をすくなくしたので、1597 年ロストックへ写った。ルドルフ 2 世をそれを知り、1599 年 6 月、ティコをプラハ宮廷に招いて、ベナツキ城を与えた。ケプラーがティコを訪ねてきて助手になった、あるいはティコが助手としてケプラーを呼んだ。ブラーエは、天文学者、占星術師、錬金術師、作家。ベナテク城を天体観測の場とした。新しい天文台を建設。一年間研究した。ルドルフ 2 世は、彼をプラハに呼び戻した。プラハで彼が呼んで雇用した助手ケプラーと共同研究した。ティコは月が地球を公転し、惑星が太陽を公転し、太陽は地球を廻るとみた。ティコは望遠鏡を使わずに膨大な観測資料を残した。ケプラーはコペルニクスを正しいとみた。ティコの正確な観測を大いに尊敬した。1600 年 ケプラーがくる。ティコと同じ宮廷数学者になり、チコは 1601 年に亡くなる。

ヨハネス・ケプラー

ケプラー (1571-1630) はドイツ生まれ、家が貧しかった。父は傭兵になった。プロテスタントだった。ラテン語学校、神学校へ通う。テュービンゲン大学神学科へ入り、天文学が面白くなり、プトレマイオスとコペルニクスを学んだ。1594 年卒業。グラーツで、数学と天文学を教える教師となった。1596 年「宇宙の神秘」を出版し、コペルニクスを全面的に支持する。ケプラーが初めてだった。ガリレオは手紙を送り、賛成した。しかしフェルディナント (23) がグラーツからプロテスタントを退去させることになり、ケプラーは失職した。-

ケプラーをティコは呼んだ、あるいはケプラーがティコを訪れた。これでケプラーはティコの元で助手あるいは共同研究者となり、ルドルフ 2 世に宮廷付き占星術師として仕えることになった。ティコの死後、ケプラーはティコの観測結果を整理した。1609 年「新天文学」を出した。

ガリレオは「星界からの報告」1610 年をルドルフに献上した。それをルドルフ 2 世はケプラーに貸した。ルドルフ 2 世の買った望遠鏡をケプラーに貸し、彼は天体望遠鏡を作った。『ルドルフ表』をケプラーは後に完成し、1627 年に出版した。(24)

リヒテンシュタイン

リヒテンシュタイン侯は、14 世紀からハプスブルクに仕えた。

ルドルフ 2 世は、リヒテンシュタイン家のカールを 1599 年から 1607 年まで宮廷長官 (Chief Intendant) に任命した。1608 年に侯爵にし、カール 1 世侯となる。リヒテンシュタイン家もクンスト・カマーを作った。カール一世 (1569-1627) は、ジュネーヴに学び、1588 年にフランスで研究旅行をした。

リヒテンシュタイン家は 12 世紀にシュヴァルツエンベルグ家のハインリヒがウィーン郊外にリヒテンシュタイン城をたてた。ウィーンのメートリングに城があった。

1156 年以前、フーゴ伯がリヒテンシュタイン城の継承者になる。バーベンベルグ家に仕える。1276 年オーストリアがプシェミスル家からハプスブルクになり、リヒテンシュタインはハプスブルクに仕える。南メーレンに居城を持った。その後、系統は絶える。

14 世紀終り、ヨハン 1 世がハプスブルクのアルブレヒト 3 世に仕える。15 世紀前半、ハプスブルクのアルブレヒト 5 世にヨハン 2 世は懲罰を受ける。15 世紀半ば、懲罰がとり消される。

リヒテンシュタイン家はハプスブルクからモラヴィアやボヘミアに領地を与えられた。またルドルフ 2 世により、1608 年に侯の位を与えられた。

カール 1 世侯（位 1608－27）と息子カール・オイゼビウス侯（位 1627－84）が美術品の収集をした。ルドルフ 2 世はリヒテンシュタイン家のコレクションを絶賛した。リヒテンシュタイン家は 1719 年に自治権を得た。初代カール 1 世（1569－1627）は、モラヴィア生まれ、プロテスタントからカトリックへ替わった。ウィーンで、ルドルフ 2 世、マティアスに仕えた。ルドルフ 2 世の最高宮内長官、顧問官になった。カール 1 世はワイセンベルグの戦いでフェルディナント 2 世の側に付いた。そしてボヘミア貴族 27 人の処刑を行った。1622 年にフェルディナント 2 世により、ボヘミア領事に任じられる。1623 年フェルディナント 2 世により、帝国諸侯身分になる。プラハで没。リヒテンシュタインの首都はファドゥツである。ウィーンに夏の宮殿がある。（25）

リヒテンシュタインは、カトリック改宗者、経済面で抜群の眼識をもった。晩年のルドルフに影響力をもった。ルドルフとマチアスが対抗した時、彼はマチアスに寝返った。

ジュゼッペ Giuseppe・アルチンボルド

1525 年、アルチンボルドは、ミラノで生まれた。父は画家でピアジョという。

美術（建築と絵画）史では、ルネッサンス → マニエリスム → バロックとなり、彼の時期はマニエリスムである。

ミラノではレオナルド・ダ・ヴィンチが活躍していた。ミラノにダヴィンチの影響があった。なにしろレオナルドは 20 年以上ミラノにいた。アルチンボルドの時代で有名なミラノ出の画家はカラヴァッジョ（26）である。カラヴァッジョはダ・ヴィンチを学んだ。アルチンボルドはマニエリスムの画家であるが、カラヴァッジョはマニエリスムを学ばなかった。彼からバロックが生まれる。

アルチンボルドはミラノ大聖堂のステンド・グラスをデザインした。

1562 年、神聖ローマ帝国皇帝フェルディナント 1 世の宮廷画家として、成功を求めてウィーンへ行く。おそらく長男・大公マクシミリアンの要請である。36 才だった。宮廷では絵だけでなく、装飾や衣装も式典もデザインをする。

アルチンボルドは、野菜や魚、木や石、果物や花、本、などを寄せ集めて、人間の姿に見えるように描いた「寄せ絵」で有名である。1563 年、「王の画家」といわれる。『四季』連作を、マクシミリアンのために作る。ウィーン時代に寄せ描きをかいた。独創ではない。

1564 年、フェルディナント 1 世が没し、マクシミリアンが 2 世として皇帝位についた。彼は、1566－7 年 一時、イタリアに帰国した。

マクシミリアン 2 世の長男ルドルフは、1572 年にハンガリー王になる。1575 年、23 才

で、ボヘミア王になり、この2つの戴冠式を、アルチンボルトがデザインした。

アルチンボルトは1569年、「4大元素」をマクシミリアン2世に献上した。彼は大いに気に入った。くり返しコピーを描かせ、4つのヴァージョンがある。アルチンボルトには確かな技術と遊び心がある。1573年にも「四季」シリーズを作る。

1576年、マクシミリアン2世が没した。アルチンボルトとマクシミリアン2世は同年だった。息子ルドルフが神聖ローマ帝国皇帝となる。

1578年、ルドルフ2世は大病を患った。胃炎だった。転地療養で、アルチンボルトらとプラハへ行く。そこで解放された気分となった。これでひそかに移転を準備する。アルチンボルトも才能が解放されるように感じた。

1580年、彼はルドルフ2世から貴族の称号を受ける。皇帝は彼に1550グルデンの報奨金を出す。

1583年、ルドルフ2世は、宮廷をウィーンからプラハに移す。アルチンボルトも一緒した。1587年、アルチンボルトは60才になったので、故郷に帰した。彼はウィーンとプラハで合計25年勤めた。プラハを去り、ミラノへ帰った。大いなる名声と富を得た。そこで伝記を書かせたりした。

「庭師・野菜」は、上下絵である。つまりひっくり返しても絵になる。1589年、ルドルフ2世に『フローラ』を送る。

1591年、「ウェルトウムヌスとしての皇帝ルドルフ2世」で、ルドルフを描いた。ウェルトウムヌスとは、古代ローマの豊穡の神の名であり、ルドルフにこれを送った。(27)ルドルフ2世は喜んだ。ミラノに帰って3年後だった。その、花、野菜、果実は、オスマン帝国から持ち帰った珍しいものである。もろこしは、メキシコ原産であり、コロンブスがヨーロッパに伝え、オスマンで大規模に栽培された。

1592年、彼はルドルフ2世から宮中伯の称号を得る。1593年、腎結石でミラノで死す。彼はマニエリスムの代表者であった。(28)

ルドルフ2世は、ラビ・レーウ師と会う。呼んで話を聴く。ユダヤ居住区の彼の家にも行った。イエフダ・レーヴ・ベン・ベザレル(1525-1609)といい、プラハの神秘思想家だった。ゴーレム伝説の主人公である。ポズナニに生まれたらしい。父もラビだった。1553年から1588年までモラビアの首座ラビになった、88年にプラハに来て、ラビに就任した。1592年にルドルフ2世もいれて説教をした。1592年にポーランドの主席ラビになった。晩年プラハに戻り、亡くなる。墓がユダヤ人墓地にある。

ユダヤ人豪商マイスルは、対トルコ戦費を援助した。プラハには13世紀に中欧最大のゲッターがあった。プラハの中世期に人造人間ゴーレムの伝記が生まれた。自分で動くドロ人形で、ラビが作る。

ネーダーランドのルーカス・ファン・ファルケンボルヒの2枚の絵。エルンストが入手し、ルドルフ2世に渡った。

ヨーロッパ中から学者や芸術家がプラハに集まった。プラハは後期ルネッサンスの中心となった。ネーダーランドのルーランド・サヴェーリが初めて生物画を板絵で描いた。ルドルフ2世の宮廷画家であった。

ボクスカイの本が1560年代に、フェルディナント1世に捧げられた。その写本にだま

し絵による装飾が、ゲオルグ・ホフナーゲルによって 1594-6 年に作られ、ルドルフ 2 世に捧げられた。ホフナーゲルはネーダーランドの画家で詩人で人文主義者だった。1594 年にもう 1 つの写本に装飾がつくられた。

ルドルフ 2 世は知的な才能があった。若い時、政治判断が的確だった。しかし精神的錯乱に時々おそわれるようになった。ルドルフのコレクションは、一部は 30 年戦争で略奪され、一部はウィーンに持ってゆかれ、あとはプラハ?に保管された。

マティアスは 1578 年 ネーダーランド 7 州に統治者として招かれた。フェリペ 2 世は認めない。1581 年まで留まった。かつて 1593 年 兄により、オーストリア総督に任命されたことがある。

ルドルフ 2 世は 1606 年、ハンガリーで穏健化のため、信教の自由を認めた。1608 年に弟のマティアスに譲った。ボヘミア王位は譲らなかつた。1607 年 ウィーンでマティアスを宗主とする密約ができた。1609 年 チェコのプロテスタントはその機会を利用してルドルフ 2 世への支持の引き替えに、1575 年の「チェコの信仰告白」を承認させた。ユダヤ人も保護する。

ルドルフ 2 世の甥パッサウ司教レオポルトが、プラハ占領を企てた。チェコの貴族はルドルフ 2 世を見限った。

ルドルフ 2 世はスペイン育ちにも拘わらず、宗教的には寛容政策をとった。だが政治や宗教にはあまり手をふれなかつた。

ハプスブルクの兄弟争いが起きた。弟マティアスが支配権を望み、これを否定されてからだった。ルドルフに子がいないので、後継者を決めるよう弟が迫った。弟マティアスとの関係は最悪だった。ルドルフには、政治的才能はない。

1592-1606 年にはトルコ戦争だった。1606 年の講和でトルコとオーストリアが対等になる。そして献納金もなくなる。

トランシルヴァニアとハンガリーにドイツ人とプロテスタントが多い。オーストリアの軍政官がハンガリーでプロテスタント弾圧をしたので、プロテスタントのイシュトヴァン・ボチカイが反旗を翻す。オスマン帝国はこれに乗じ、スルタン・アフメト 1 世はボチカイを王と認める。しかしボチカイは王冠をオーストリアに返還した。

マチアスらはボチカイとの講和を主張し、交渉し、1606 年、ボチカイとウィーン和約をした。マチアスは 1608 年、ハンガリー王になる。ルドルフ 2 世の政策に不満を抱いた弟マチアスが、ハンガリーやモラヴィアの貴族を味方につけて、軍隊を率いて 1611 年にプラハに迫った。マチアスは、プラハに入ってレオポルトを追放し、マチアスは王に選ばれた、彼は寛容政策をとらない。兄を帝位からひきずり降した。ルドルフ 2 世は、弟マティアスに幽閉され、ボヘミア王位を譲る。ルドルフにはプラハ城だけ与えられた。1612 年、同年マティアスは皇帝になる。マティアスは宮廷を再びウィーンに戻す。

ルドルフ 2 世は、1552 年生まれ、没 1612 年だが、皇帝として 1576-1612 年、ローマ王として 1575-1576 年、だから 2 年で皇帝になる。ローマ王はやめている。ハンガリー王は 1572-1608 年で、1608 年にハンガリーで大反乱がおき、途中でやめて、弟マティアスに譲った。ボヘミア王は 1575-1612 年で、皇帝になる 1 年前になっている。ルドルフ 2 世は 1612 年に没した。マティアスは兄の葬儀を執り行った。

トランシルヴァニア公国の貴族ポチカイ・イシュトヴァン (1557-1606) やベトレン・

ガーボル (1580–1629) は、ハプスブルクに抵抗し、トランシルヴァニア公国を維持した。1604年、ポチカイ・イシュトヴァーンはハプスブルクに対して反乱する、1606年トランシルヴァニア公に即位し、06年まで在位した。

1613年、ベトレン・ガーボルがトランシルヴァニア公に1629年までなる。

結び

モハッチの戦い (1526年) で、ラヨシュが戦死し、それ以前に2重の結婚がされていたことは、ハプスブルクにとって非常に大きなことであった。東では単にオーストリア国主であった同家が、帝国に発展する前提になった。

ハプスブルク家第1代ルドルフ1世も、オーストリアとボヘミアの支配者にはなったが、後が続かなかつた。モハッチの戦い以降の進展が重要であった。また勿論マクシミリアン1世は、東方帝国が出来るだろうとは考えもしなかつただろう。

- (1) 江村洋『中世最後の武士』中央公論。
- (2) ミラノ公。残忍な圧制者 (1444-1476)、2人目の妻との間に3人の子、そして庶子たち、愛人との間に庶子4人を作る。
- (3) 西川『狂女王フアナ』採流社。
- (4) 江村洋『カール5世』河出文庫。
- (5) ヨーロッパ中世で、距離が遠かったり、来られなかった場合、新郎でなくその縁者が代理の婿役を演ずる。この時は祖父マクシミリアン1世が演じた。
- (6) マルゲリータ・ダウストリア (1522 - 1586)。初め、フィレンツェのアレッサンドロ・メディチと1536年に結婚、だが彼が暗殺され、1538年、パルマ公オッターヴィオ。ファルネーゼと結婚する。ネーダランド総督として1559-1567年まで勤める。オランダではパルマ公妃マルハレータとして知られる。
- (7) 三橋富治男『オスマン帝国の栄光とスレイマン大帝』清水書院 1984年。
アンドレ・クロ『スレイマン大帝とその時代』法政大 2000年
- (8) Das Konigreich Ungarn
- (9) Robert A. Kann, The History of Habsburg Empire.
- (10) ヤーノシュ・サーヴァイ『ハンガリー』白水社 1999；南塚信吾『図説ハンガリーの歴史』ふくろうの本；パウル・レンドヴァイ『ハンガリー人――光と影の千年史』信山社；『東欧史』山川出版社
- (11) 西川和子『スペインの貴公子フアン物語』彩流社
- (12) 西川和子『オペラ「ドン・カルロス」のスペイン史』採流社
- (13) 拙稿「ウィレム・ファン・オランエ」。ヴェロニカ・ウエッジウッド『オラニエ公ウィレム』文理閣
- (14) エヴァンス『魔術の帝国―ルドルフ2世とその世界』筑摩書房、1988年 p.47
- (15) その他代表作は、「ケレスとバッカスと凍えるヴェヌス」「アポロンとミュージズ」「グラウコスとスキュラ」「オデュッセウスとキルケ」2つある、「へ

- ラクレスとオムパー」「ヴァルガンとマイア」「ヴェヌスとメルクリウス」
「メルクリウスに見つかったヴェヌスとマルス」「ユピテルとアンティオペ」
「アンジェリカとメドーロ」「キリストの洗礼」「ヴァルガの鍛冶場のヴェ
ヌス」など、ウィーン美術史美術館に多くが所蔵されている。
- (16) 拙稿
 - (17) エヴァンズ、p、54
 - (18) 作品は「鳥の居る風景」（1628年 ウィーン）、「農家の庭」（1610年 プ
ーシキン美術館）、「ブーケ」（1624年）、「ドードー」（1624年）、「荒
野のエリア」（1625年）。
 - (19) 彼の邦訳と研究書は、『自然の学』人文書院 1984年、『パラケルススと魔
術的ルネサンス』勁草書房 2013年、『パラケルススとその周辺』白馬書房
1987年、種村季弘『パラケルススの世界』青土社 1966年、『パラケルスス』
人文書院 1984年、野田又夫の本にも出ている。
 - (20) ピーター・フレンチ『ジョン・ディー エリザベス浅野魔術師』平凡社
 - (21) プラハから南、ブルタバ川そいの町。
 - (22) Petr Corney, Great Stories inCzech History.Prah 2005
 - (23) フェルディナント大公である。マクシミリアン2世の弟。フェルディナント
1世とアンナ・ヤギエロとの間の次男。二番目の結婚で、姪のアンナ・カテ
リーナ。ゴンザーガと結婚し、その娘アンナが皇帝マティアスの皇后になっ
た。
 - (24) アーサー・ケストラー『ヨハネス・ケプラー』ちくま学芸文庫。
ヴォールケル『ヨハネス・ケプラー』大月書店。
ギルダー『ケプラー疑惑』地人書館。ハンヴィル『ケプラーの憂鬱』工作舎。
 - (25) 『リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝』朝日新聞社、東映 2012-13年
 - (26) 『カラヴァッジョ伝記集』平凡社。
 - (27) これは現在スウエーデンのウプサラ、スコークロステル城にある。かつてス
ウエーデンがプラハを攻め、この絵を奪ったからである。
 - (28) 『アルチンボルド展』国立西洋美術館 2017年。

注以外の参考文献)

カウフマン『綺想の帝国』工作社 1995年
伊藤哲夫『神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ2世との対話』井上書院
『チェコスロヴァキア史』クセジュ 白水社
森洋子「リヒテンシュタイン侯爵家コレクションの2人の偉大な立役者」
『ルドルフ2世の脅威の世界展』文化村 2017年
薩摩秀登『物語 チェコの歴史』中公新書 2006年
ピエール・ボヌール『チェコスロヴァキア史』白水社 1969年
ペトル・クラール『プラハ』成文社 2006年
Eliska Fucikova, Prague in the reign of Rudolf II, Prague 2014
Peter Marshall, The Mercurial Emperor. London 2007

マイオリノ『アルチンボルド』ありな書房
フランセス・イエーツ『薔薇十字の覚醒』工作舎。同『魔術的ルネサンス』晶文社
『プラハ』 Vitalis 2018
『リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝』朝日新聞社、東映 2012-13 年
川上恵理「ルドルフ 2 世の宮廷におけるローマの擬人像」（神戸大『美術史論集』2015 年）
同「同時代からみるルドルフ 2 世のクンストカマー」同 18
同「神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ 2 世の 1595 年の勅書による周辺国ギルドへの影響」
同 17
同「ルドルフ 2 世治下のプラハにおける芸術運動」『鹿島美術研究』33
『神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ 2 世の脅威の世界 展』文化村 2017
『リヒテンシュタイン侯爵家の至宝展』TNCプロジェクト 2019-20
アレクサンドル・コイレ『コスモスの崩壊』白水社、『閉じた世界から無限宇宙へ』
みすず書房。
速水敬二『ルネサンス期の哲学』筑摩書房
Rossella Vodret, Caravaggio. L'opera completa. Milano 2009
シューメイカー『ルネサンスのオカルト学』平凡社
シルヴィア・フェリーノ＝バグデン「アルチンボルド」（『Arcimboldo アルチンボルド展』国立西洋美術館 2017 年）
『ハンガリー史』1. 2.（仏訳も参照している）Pamleni hrsg., Geschichte Ungarns.

本論文の欧文題名

3 Emperors of eastern Habsburg Empire